（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　　竹元　規人

国共分裂（1927）と中国国民党の全国統一（1928）を起点とする「1930 年前後の中国」は、近代中国における中国史学の展開において、２つの意味で重要な画期であった。一方では、マルクス主義に基づき中国史を発展段階論の枠組で捉え直すことにより中国革命の性質（ブルジョワ革命か社会主義革命か）を解明しようと“中国社会史論争”が発生する。他方で、中央研究院歴史語言研究所など中国史研究を任務とする専門学術機関が整備され、胡適の系譜に連なる顧頡剛や傅斯年たちが精緻な実証主義的中国史研究を立ち上げていた。

従来、1930 年代中国史学史についての研究は、中国共産党が公式に奉じるマルクス主義的中国史像が成立する過程の解明に関心を持ち、前者の側面を分析対象とするものが多かった。それに対して、本論文では後者の側面を分析対象とし、顧頡剛と傅斯年を中心に据えてその学術の内容を詳細に分析するとともに、併せて学術の制度化に対する彼らの見解や行動を検証する。この対象選択は、本論文の特色の一つである。

本論文は４つの章から構成される。第１章「中山大学語言歴史研究所から中央研究院歴史語言研究所へ」は、中国史研究を任務とする専門学術機関が整備される過程を詳細に跡付けている。第２章「国民革命前後における胡適、顧頡剛と傅斯年の関係」は、一般に“胡適派”と一括されてその同質性が強調される３人の学者の間に進行する学術の分岐過程に緻密な分析を加える。第３章「『中国』の構想と古代史研究」は、“中国とは何か”という中国ナショナリズムの根本に関わる問いについて、特に古代史（“上古史”）の領域で彼らが学問的にいかなる答えを出したか検証し、かつ彼らの回答を王国維・郭沫若・章炳麟ら異なる立場の学者たちの回答と比較する。第４章「『学術社会』の構築」は、中央研究院の院士選挙を素材に、学術の自律を求める学者たちの活動が分析される。これら４つの章は、すべて著者が中国・台湾で収集した未公刊資料を含む膨大な一次史料に基づいて立論されている。中国近現代史研究には理論的枠組みが先行する傾向がときに見られるが、本論文はあくまで一次史料に即して立論しており、これも大きな特色である。

ただ、細部の考証に拘る余り、完成した論文としては不要で冗長な記述が残っている。また、序章で問題設定が充分説明されず、本論各章の独立性も高いため、全体の構造が見えにくい。さらに、引用史料の日本語訳文の練度が必ずしも十分ではない箇所が散見する。

そうではあるが、本論文はこれらの問題点を打ち消す長所に充ちており、次の２点が特に顕著である。すなわち、これまで日本においては殆ど論じられることのなかった、草創期の中国アカデミズムにおける中国史をめぐる学術の展開を詳細に跡付けてその全体像を明らかにしたことと、一括して扱われる傾向にあった胡適・顧頡剛・傅斯年の３人につき、各人個別の学術の特徴や相互関係の変容に対する綿密な跡付け作業を行ったことである。

以上により、審査委員会は博士（文学）の学位を授与するのが適当であると判断する。